

中国日本商会

みつま

三瀧先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



三瀧コラム 中国「津津有味」-47

中国経済の現状を、次なる飛躍を目指して反動をつけようと身をかがめていると捉えるか、様々な矛盾が臨界点に近づきつつあると捉えるのか、こうあれかしと祈る人の希望的観測（肯定的、否定的にかかわらず）も絡んで様々な評論が飛び交う。それにトランプとの軋轢の影響と、降って湧いたコロナウイルスの襲来が加われば、短絡的（？）悲観論が俄かに力を得てくるのもむべなるかな、と言えよう。ただ、世界的規模で仮に半年も蔓延が続いた場合を考えれば、短絡どころか、対策を考えなかった企業は極楽トンボの汚名を免れない。

中国経済が厳しい状況に立たされていることは誰の目にも明らかだが、それをどうやって切り抜けるかという努力はここ数年様々に行われている。そのプラス面が日本で十分に報道されているか、と言えやお世辞にも十分とは言えない。中国における人工知能、AI、クラウドといった最先端技術に関わる新しい産業の目覚ましい躍進ぶりは頻繁に紹介されるようになったが、その他の分野、特に社会の根底からの変革に割かれているスペースが十分であるは言い難い。

神戸大学の梶谷懐教授が中公新書から『中国経済学講義』を出版されたのは2018年9月である。その内容は公平な立場に立った説得力のあるもので、一般人にもわかりやすく、近年の中国経済を正確に把握したい人にはうってつけの本と言えよう。実際、売れ行きは好調で、処々に読まれており、大学での教材にも使われている。

そのP10に「『中国政府のごまかしが利かない』究極の統計として、米国の軍事気象衛星により撮影された夜の地球表面の画像データを用いた研究がある。」という言葉で始まるくだりがある。それによると、この衛星による夜間の光強度のデータは、「都市域の拡大、人口分布面の推計、エネルギー消費量・GDPの推計などの人口・経済指標と強い相関を持つ」という。但し、筆者はこうも結んでいる。「14年以降のデータを用いて同様の推計を行った場合は異なる結果を得られる可能性がある」

中国でもLEDの普及は目覚ましい。いや、目覚ましいどころか凄まじい！煌々と都市の夜景を満艦飾に浮き出させる無数のLEDの光を、各都市の発展程度のバロメータなどと考えるととんでもない勘違いをする。派手なことが大好きな中国人は、都会でも田舎でも、高層ビルでも民家でもお構いなしにイルミネーション漬けにする。そうなれば、夜間の光強度のデータが「人口・経済指標と強い相関を持つ」という必然性が途端に怪しくなる。ところがこれが瓢箪からコマになりつつある。中国では昨夏以来、しきりに「夜間経済」という言葉が活字になり始めた。国務院は夜間消費の活性化を奨励する「意見」を発表し、人民日報も2018年10月に「経済の焦点、夜間経済観察」という報道シリーズを連

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



載した。本来、「夜市」は南方の風景だったが、夜間照明で北方でも人々が街に繰り出すようになり、それを当て込んだ飲食店増え、夜間消費が拡大した。それが、大都市では地下鉄、地方では公共バスのサービス向上を促した。夜間消費には食事類のケータリングや夜間のネットショッピングも含まれる。一日の消費に占める夜間消費の割合は、2019年には既に36%にも達し、今またコロナウイルスでケータリングが急増しているが、その行方にも注目が集まる。